

## 岡崎市八幡町の二七市と西三河定期市網

新 實 正 男\*

### I 序 論

定期市に関する地理学の従来の研究は、市の発展・存続要因及び市の歴史的発展過程の追究、地名研究や都市研究のなかに市を位置づける地誌的研究、定期市の地域性解明などであった。

このような従来の研究においては、定期市というものは、後進的地域にのみ存在しえるものであり、高度に成長した商業とは競合しえず、廃止に追い込まれていくものであるという認識にたつたものが多かった。しかし、中島(1977)が指摘した定期市に関する従来の認識に対する疑問を契機に、定期市が、都市商業の力を利用し、これと共存共栄する面もあるのではないかと考えられる。

本論文の目的は、以上の観点にたつて、都市中心部に立地する定期市の実態を探り、その存続要因の追究を通して、都市商業と共存共栄を示している定期市の1類型を明らかにすることである。

### II 西三河の定期市の特徴

昭和56年現在、西三河では30か所で定期市が開設されている。この分布については、中島が「三河の定期市」(1977)のなかで、「①東三・西三両地方ともその上位中心都市—豊橋・岡崎—にも立地する。②平野のみに分布し、山間河谷部には立地しない。③分布密度が高く、定期市間の距離が短い。④市がたつのは、程度の差こそあれ、中心集落の性格をもつところである。」としているが、

\* 豊田市立寿恵野小学校教諭

これらの指摘は、西三河の定期市の分布の特色にそのままあてはまる。

各定期市の市日構成は、一六が5か所、二七が4か所、三八が7か所、四九が3か所、五十が9か所、一五・四がそれぞれ1か所であり、多くが6齋市である。同一の市日に開催される定期市は、そのヒンターランドの関係で競合を避けるように分散されている。ただし、市間距離が2 km程度のものも存在しているが、その場合は、相方の定期

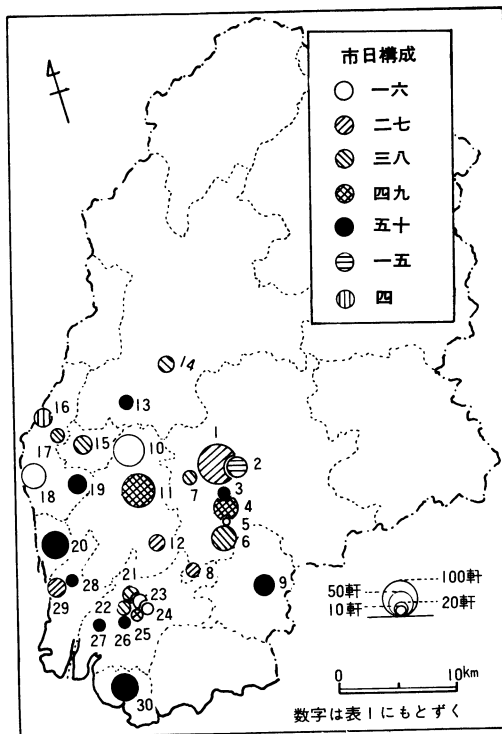


図1 西三河の定期市 (1981実態調査による)

表1 西三河の定期市

番号	開催位置	市日	出店数	起源(年次)	立地環境
1	岡崎市八幡町	2・7	133	昭和30年	道路を遊歩道化し、その舗道上に一般商店と向いあって露店がでる
2	岡崎市中町	1・5	30	昭和32年	道路の北側の舗道上に一般民家と向かいあって立地
3	岡崎市明大寺町	5・10	14	昭和34年	岡崎市立図書館の裏側の通りを遊歩道化して立地
4	岡崎市羽根町	4・9	48	昭和26年	工場わきの道路(巾3m)に立地
5	岡崎市針先町	1・6	2	昭和42年	御鞆社の境内に立地
6	岡崎市福岡町(土呂)	3・8	45	元龜2年(1571)	砂川の堤防上に立地
7	岡崎市矢作町	3・8	14	昭和49年	住宅地内の空地に立地
8	岡崎市中島町	2・7	17	昭和22年	日長神社(市の神をまつる)の境内に立地
9	額田郡幸田町	5・10	30	昭和26年	幸田駅前通りの裏通りの片側に一般商店と向かいあって露店がでる
10	安城市今本町	1・6	73	昭和41年	白山比賣神社の境内に立地
11	安城市花ノ木町	4・9	89	昭和35年	八幡社境内に立地
12	安城市桜井町	2・7	30	昭和35年	桜井神社の境内に立地
13	豊田市若林町	5・10	20	昭和52年	八幡宮境内の駐車場に立地
14	豊田市大林町	3・8	15	昭和32年	トヨタ生協の東側の道路わきの空地に立地
15	知立市広見町	3・8	40	昭和49年	市役所前の空地に立地
16	刈谷市今川町	4	25	昭和44年	今川八幡宮の境内に立地
17	刈谷市一ツ木町	3・8	18	昭和25年	昭和55年から現在の神明社境内に立地
18	刈谷市御幸町	1・6	43	昭和35年	刈谷市御幸駐車場のわきに立地
19	刈谷市野田町	5・10	20	昭和44年	聖田八幡宮の境内に立地
20	高浜市高浜町	5・10	52	昭和38年	高浜市民センターの西の空地に立地
21	西尾市菅原町	3・8	28	昭和45年	羽勝天満宮の境内に立地
22	西尾市綿城町	3・8	25	昭和40年	西尾市体育館西の空地に立地
23	西尾市衣文町	1・6	40	昭和47年	衣文神社の境内に立地
24	西尾市寄住町	1・6	14	昭和45年	寄住稻荷神社の境内に立地
25	西尾市永楽町	4・9	10	昭和50年	駐車場内に立地
26	西尾市鶴ヶ崎町	5・10	10	昭和46年	空地に立地
27	西尾市平坂町	5・10	10	昭和35年	空地に立地
28	碧南市西山町	5・10	12	昭和43年	御鞆社の境内(西山町児童遊園)に立地
29	碧南市新川町	2・7	30	昭和28年	新川駅近くの空地に立地
30	幡豆郡一色町	5・10	50	昭和40年	諏訪神社の境内に立地

(1981 実態調査による)

市の規模が、中規模かもしくは小規模である。<sup>2)</sup>

定期市の開設場所は、社寺の境内が14か所で卓越しており、次いで私有地が10か所で、道路上で開設される市は5か所のみである。このような状況は、モータリゼーションの発達等、定期市を囲む環境の変化により、市の開設場所の変遷や新規開設における場所の限定によるところが大きい。

起源についてみると、岡崎市福岡町(土呂)の市が江戸時代と最も古い<sup>2)</sup>が、他はすべて戦後におこった新しい市であり、昭和20年代に5か所、30年代に9か所、40年代に13か所、50年代に2か所の開設があった。西三河において、昭和20年代か

ら30年代にかけては、市の発生期にあたり、昭和40年代はその発展期にあたる。しかしながら、40年代以降の定期市は、モータリゼーションの発達により、道路上で開設することができず、社寺の境内や空地に立地している。また、それ以前に開設された多くの市も、当初の道路上の開設から移動を余儀なく<sup>3)</sup>されている。

### III 岡崎市八幡町の二七市の概要

二七市は、岡崎市八幡町で2と7のつく日に開設され、出店規模は約150軒、1日に約15,000人の客を集める西三河最大の定期市である。

**二七市の起源とその消長** 戦災によって壊滅し

た岡崎市の商業が復興するまでの間、その役割を担ったものは闇市であった。現在、二七市が開かれる八幡町には、昭和21年から27年までの間、通称中央マーケットの闇市が存在した。しかし、商業の復興にともない、中央マーケットは移転を余儀なくされ、商店街としての八幡町は、復興する他の商店街に遅れをとった形となった。そこで八幡町は、市開設によって再び商店街に灯をともしようという意志決定をしたのである。

街商組合との協同事業として、二七市は、昭和30年12月12日に初市が開かれた。当初、当面の打開策という形で始められた二七市ではあるが、60軒という出店規模も昭和30年代中頃には200軒を越えるという成長を示し、昭和46年12月からは道路を遊歩道化する形態となった。その間、岡崎市は、昭和46年から都市再開発をすすめて、二七市周辺には大型店が多数進出したが、その影響はあまり大きくはない。現在、二七市は後継者不足によって出店数が徐々に少なくなっている程度であり、約150軒の出店規模をもっている。

**二七市の開設位置** 二七市の開設位置は、岡崎市八幡町で、市街地の中心部にある。

岡崎市の市街地は、南流する矢作川とそれに東方から合流する菅生川との合流点の北東に位置し、両河川の形成した中位段丘面上に展開している。歴史的には、江戸時代に城下町として発達し、東海道の陸運と矢作川の水運の結節点として繁栄した。以後、岡崎市は、西三河の中心地としての地位を固め、昭和54年の商業統計によれば、商店数6,026、販売額4,642億円で、西三河最大の商業都市となっている。

二七市の開設される八幡町は、岡崎市のほぼ中心に位置し、中心商店街であり都市再開発地域でもある本町・康生通に隣接した地域である。また、交通の便もよく、康生バスターミナルにも50m程

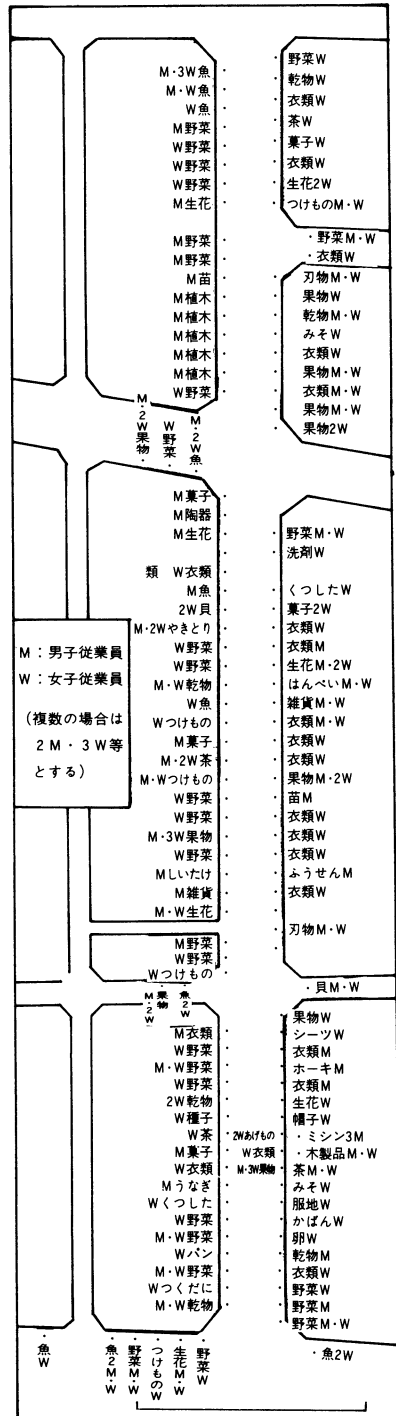


図2 二七市の出店配置 (昭和56年8月2日, 実態調査による)

のところに立地している。

#### IV 出店者とその配置

**出店者の配置** 二七市の出店者は、それぞれの業種のもつ特徴にあわせて配置されている。

野菜を売る店は、涼しい通りの南側に2・3軒ずつあつめられて、それが分散するように配置されている。このような配置形態をとる思惑としては、野菜という品物に対する配慮と、市において野菜の人気が高いことによる他業種の出店者に与える好影響という配慮があげられる。このような場割は、衛生的視点、商品に対する配慮、業種別販売効果<sup>4)</sup>が考慮に入れられて、すべての業種に対して配慮されている。このようなことは、当然のことながら、定期市の存続の柱の一つとなっているのである。

この場割については、その恒常性が認められる。昭和56年12月2日の出店配置を同年8月2日の出店配置と比較すると、休んだ店が5軒、新たな出店が40軒であり、残りの128軒・74.0%の店は、全く同じ場所で店を出している。この場割の恒常性は、出店者と顧客を顔なじみにし、二七市が、固定客をつかむことを可能にしているのである。

**二七市の出店者** 二七市の出店を業種別にみると、野菜32軒・衣料品22軒・果物10軒・乾物7軒・生花7軒が目立ち、食料品が81軒で全体の60.9%を占めている。出店者は、男子67人・女子123人と女子の卓越がみられる。1店当たり平均出店者数は1.4人であり、出店者の家族か、パートとして雇った人の手伝いがみられる。出店者は、市専業商人<sup>5)</sup>が主流を占めており、133軒中93軒・69.9%に達する。非専業商人は、野菜・植木・苗を商う出店者<sup>6)</sup>にかざられている。

このように、市専業商人が、市で主流を占める状況は、西三河における他の定期市にも言えることであるが、市専業商人のメリットとしては、常

表2 二七市の業種構成  
(昭和56年8月2日)

	出店のうちわけ			出店者のうちわけ		
	出店数	市専業商人数	非専業者数	男子出店者数	女子出店者数	計
野菜	32	4	28	10	27	37
魚貝類	9	8	1	7	14	21
乾物	7	7		5	6	11
果物	10	10		7	18	25
衣料品	22	22		6	18	24
生花	7	7		5	7	12
植木	5		5	5		5
苗	2		2	2		2
菓子	5	4	1	3	3	6
帽子	1	1			1	1
卵	1	1			1	1
カバン	1	1			1	1
洋品雑貨	3	2	1	2	2	4
つくだ	1	1			1	1
みそ	2	2			2	2
茶	4	3	1	2	5	7
つけもの	5	5		2	5	7
あげもの	2	2		2	3	5
やきと	1	1		2	1	3
うなぎ	1	1		1		1
種	1	1			1	1
パン	1	1			1	1
陶器	1	1		1		1
刃物	2	2		2	2	4
くつした	2	2				
ミシン	1		1		2	2
ホーキ	1	1		1		1
シャツ	1	1			1	1
木製品	1	1		1	1	2
ふうせん	1	1		1		1
計	133	93	40	67	123	190

(実態調査による)

設店舗を持つだけの資金がなくても商売ができ、所をかえて、ほとんど毎日出店ができ、資金回転率がよいということが大きな理由となっている。また、零細なため農協等に出荷できない農家にとっても、市出店は大きなメリットをもっていることがあげられる。

二七市出店者は、主に西三河から集まるが、中には、東は豊橋、西は岐阜からもきていて、その

表3 業種別二七市出店者の居住地

	岡崎	豊田	碧南	安城	西尾	幸田	名古屋	その他	計	
靴 下	2		1		1	1	1	刈谷	2	10
ロップ	1									1
植 木	3			1	6		1			11
種	1		1							2
布 切								知立	3	1
陶 器	2									2
履 物	4				1		3			8
椎 茸								豊橋	3	1
野 菜	69		6		4	1				80
ミシン	3									3
衣 類	28	2			1		1	蒲郡	1	36
鮮 魚	3		2	1				一色	2	8
雑 貨	5			1	1		5			15
生 花	5							吉良	2	5
漬 物	3			1	1					5
果 物	12		3	1	3					19
ホーキ	1							幡豆	2	1
乾 物	5		1		1	1				10
菓 子	4			2	2			御津	2	8
佃 煮	1									1
昆 布							1	小坂井	1	3
海 苔										3
卵	5							高浜	2	5
竹 輪		1								2
寝 具	1			1				半田	1	2
菊 蓷										1
餅	1							岐阜	3	1
財 布	1									1
味 噌	3					1				4
茶				2				一宮	1	2
ワンチャ	1									2
焼 鳥		1								1
帽 子	1									1
炭	1									1
七 味							1			1
傘	1									1
計	167	4	13	11	21	4	13	25		258

(昭和45年協会員名簿より)

分布は広範囲に亘っている。出店者が多い地域は、岡崎市・西尾市・碧南市・名古屋市・安城市であるが、特に岡崎市内からは64.7%を占め、定期市出店がローカル色の強いものであることを示している。岡崎市内においても市街地中心部・北西地域・南部地域に出店者の集中地域がみられるが、北西地域<sup>7)</sup>・南部地域<sup>8)</sup>はほとんど野菜の出店者で占められ、業種的なまとまりがみられる。また、他市からの出店にも業種の特徴がみられ、西尾市からの植木、碧南市からの果物、名古屋市からの日

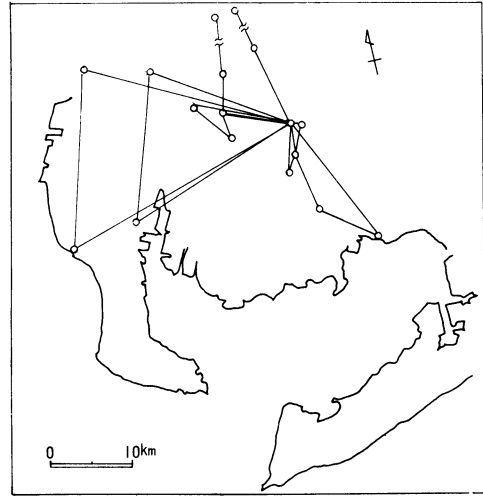


図3 果物を商う二七市出店者の移動パターン (1981実態調査による)

用雑貨というものが特徴的なものとなっている。ここで改めて二七市出店者の多い地域をみると、いずれも定期市を多くもつ地域である。それらの地域は、市専業商人を養う力をもっているといえることができる。

### V 市専業商人の移動圏

**業種別にみた出店者の移動** 出店者の主流を占める市専業商人は独自の市間移動パターンをもっているため、その業種の特徴をみていきたい。

典型的な市専業商人である果物を商う出店者は、1か月間に平均23.1日出店する。1か月の3分の2以上市に出店しているケースである。移動距離も長く、市出店の1周期である5日間の平均移動距離は40.0kmであり、西三河地域のみならず尾張地域へも出店している。

このように、1か月の平均市出店日数と5日間の平均移動距離を他業種についてもみると、日用雑貨は23.6日・36.5km、衣類は23.0日・34.3km、野菜は11.8日・10.9kmとなる。野菜を商う出店者の平均市出店日数及び平均移動距離が他業種に比

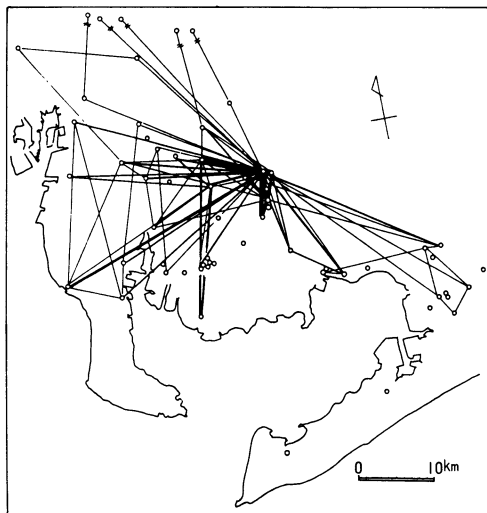


図4 二七市に出店する市專業商人の移動  
(1981実態調査による)

べて非常に少ないことが目立つが、この理由は、この業種の出店者が主に農家の人々であり、余剰生産物を居住地付近の市に出て売るという商形態をとる非專業商人であるためである。

このように市間移動パターンは業種的に差をみせており、市出店は業種のちがいにによりその商形態に差があることを示している。

**西三河の定期市網** 二七市出店者の市間移動パターンは、図4のようになる。これによれば、二七市出店者が尾張地域や東三河地域まで移動していることがつかめるが、その主な移動圏が西三河地域であり、そこに定期市網の形成がみられる。また、二七市とつながらない市は、二七市と同一市日で開設される市と、西尾市の4市のみであり、若干結びつきの強い市が存在することをのぞけば、明確な移動パターンはみられないという多岐にわたる移動がおこなわれている。このようなことは、前に述べたように出店者の移動パターンが業種的なものにかかっていることと、出店者の居住地にも規定されているためである。たとえば、岡崎市在住の二七市出店者の移動パターンをみると、

岡崎市内で短距離移動型の定期市網を形成し、主に、それによって移動しているが、碧南市在住の二七市出店者の場合では、西三河地域のみならず尾張地域へも出店するという遠距離移動型の移動パターンを示している。

このような定期市網の存在は、多くの定期市をもつ西三河であればこそ形成されうるものであり、現在、これによって、多くの市專業商人の生活を支えているのである。

## VI 二七市の商圏

二七市の商圏を設定するために、岡崎市内の各中学校の父兄に対してアンケート調査を行なった<sup>10)</sup>。各中学校区別に月1回以上二七市に来る客の割合をみると、二七市の存在する城北学区で75.6%最高の値を示し、北東へ客の多い地域が伸びている。それに対し、南部方向へは客が伸びず、2km圏の竜海学区では44.4%を示すが、それ以南では20%以下の値を示すにすぎない。このような調査結果に、客の居住地をドットした結果を加えて、二七市の商圏を設定した。

1次圏は、主に岡崎市の市街地にあるが、西は矢作川までの1.5km、南は2.5km、北及び北東は5km圏まで道路に沿ってのび、東は市街地に沿い4.5km圏までのびている。この一次圏は、二七市に来る客の来市頻度が高く、客の集中した地域である。

2次圏は、岡崎市全域に広がり、主に主要道路に沿って展開するが、二七市から南方へは道路沿いの狭い地域のみであり、それに対して北から東方面では13km圏までのびてその範囲も広いものとなっている。

二七市の商圏規模を考察するために、岡崎市内の他の定期市の商圏を同じ手順で設定して比較した。一次圏の広さでは、二七市が15.0km<sup>2</sup>であるのに対し、中町2.6km<sup>2</sup>・羽根町1.7km<sup>2</sup>・福岡町1.5km<sup>2</sup>・矢作町0.9km<sup>2</sup>・明大寺町0.3km<sup>2</sup>・中島町0.1km<sup>2</sup>であ

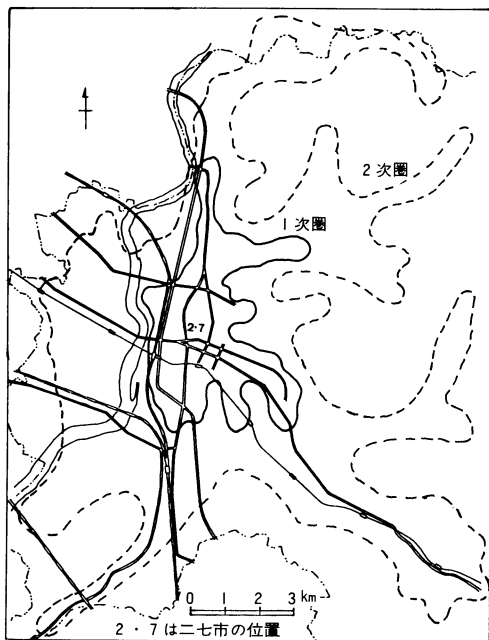


図5 二七市の商圈

(1981実態調査による)

り、2次圏の広さは、二七市が99.1km<sup>2</sup>であるのに対し、中町27.0km<sup>2</sup>・羽根町13.4km<sup>2</sup>・福岡町9.1km<sup>2</sup>・矢作町6.5km<sup>2</sup>・明大寺町1.2km<sup>2</sup>・中島町1.6km<sup>2</sup>となっている。二七市の商圈規模がいかに大きいかかわかる。また、二七市の商圈が南部方向にのびない理由が、他の定期市の商圈との競合であることがわかる。

## VII 二七市の存続要因

**二七市の地理的位置の優位性** 二七市が開設される八幡町は、岡崎市の中心商店街である本町・康生通の影の地域にあたり、その地の利が、定期市存続上の大きな要因となっている。

まず第1に、八幡町付近は、人口集中地域<sup>11)</sup>であり市街地の中心地域であるために、この地域内から多くの客を吸引することができる。

第2に、二七市に来る客の26.6%はバスを利用して、二七市は康生のバスターミナルに近い。

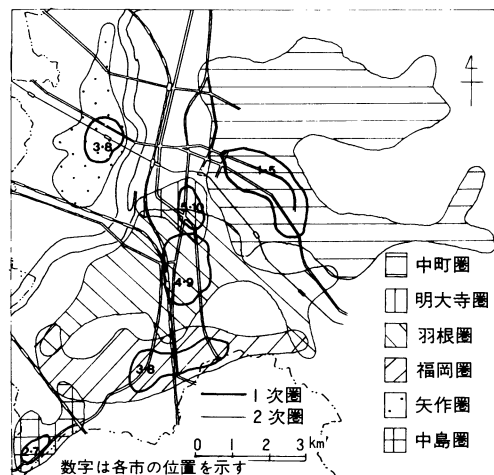


図6 二七市を除く岡崎市の定期市の商圈

(1981実態調査による)

交通の便がよいところであり、そのセンターランドをより広げうる地域である。

第3に、二七市に来る客の27.9%は他の買いものついでに来る客であるが、中心商店街に隣接して市が開設されるために、顧客を吸引する力に中心商店街の吸引力をも利用していることである。

第4に、八幡町の道路形態が一方をふさいでいるために自動車の通りが普段から少なく、遊歩道化しやすいうえに、通りが広くて多くの出店者を収容し得る通りとなっている。

第5に、二七市に来る客の32.3%は自家用車を利用しているが、八幡町の周辺は小路地が比較的多くて駐車し得る場所があり、中心商店街がもっている駐車場とあわせて、車で来ることのできる市となっている。

このように二七市は、中心商店街の影の地域がもち得る市開設にとっての地理的位置の優位性をもっていて、存続要因の柱となっている。

次に隣接商店街との関わりをみてみよう。隣接商店街の業種構成は買回品・サービス業主体<sup>12)</sup>であり、二七市の最寄品主体の業種構成とは競合し<sup>13)</sup>

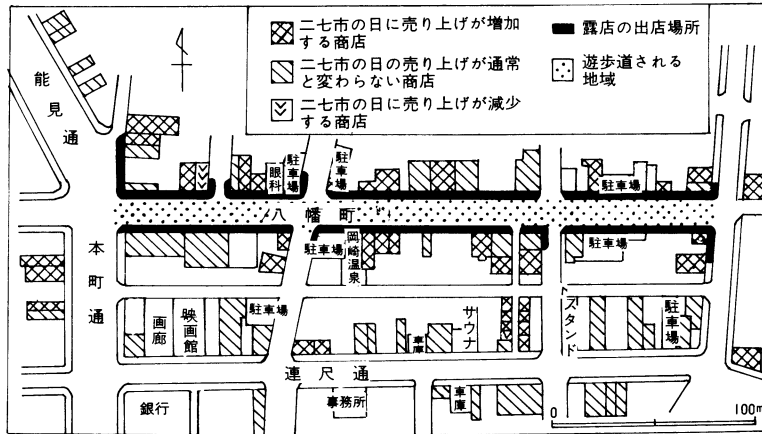


図7 二七市の周辺商店に対する影響

(1981実態調査による)

ない。逆に、二七市によって客が集まるために好影響を受ける商店が多いことが、聞きとり調査によって明らかになった。二七市は、隣接商店街との競合及びそれとの悪感情によって、外へ押し込まれることは考えられない状態にある。

**二七市を支える八幡町商店街** 二七市は、開設の経緯から八幡町と密接に結びついているが、その結びつきを八幡町の商店の経営状態からみると、二七市の開催される日に売上げが増加する商店が61.6%を占めており、二七市が直接八幡町商店街に好影響を与えていることがわかる。また、二七市に来る多くの客に対して宣伝効果があるとして、ほとんどすべての商店が、二七市開設を歓迎している。

次に出店形態から結びつきをみると、二七市での露店の出店形態は、西三河の他の定期市がもつ露店と露店が向い合う出店形態とは異なり、歩道上の露店が車道を背にして一般商店と向い合うという、商店街との結びつきが強い出店形態をとっている。

現在、八幡町の商店の中には、二七市がないとやっていけないという商店も多く、二七市あっての八幡町という考え方が強い。そのため、八幡町

は、街商組合との二七市共同管理にも力を入れ、二七市の存続に対して強力なバックとなっている<sup>15)</sup>のである。

**大規模な早期開設** 二七市は、昭和30年に開設されたのであるが、この時期は、大型店も存在せず、未だモータリゼーションの発達もなく、定期市を囲む環境は良好であった。そして、60軒の出店規模と八幡町商店街を合わせて客を集めることに成功し、30年代中頃には200軒の出店規模を得るに至った。定期市を囲む環境が厳しくなる以前に市立地に適した場所と客を確保してしまったのである。そして現在では、20数年間の経緯によって、市民に伝統的なものとして位置づけてしまった。このようなことも、二七市の存続要因の一つと考えてよい。

**二七市の魅力** 市を支えるもので最も重要なものはその顧客である。二七市の客が、どのような魅力によって市に引きつけられているのかを探ることは、市の存続要因の追究に欠かせない。

二七市の魅力としては、「安さ」と「新鮮さ」が大きなものとなっている。しかし、中学校区別に、買いもの目的と魅力を調査してみると、近隣地域では野菜・果物・魚貝類が新鮮で安いという点を



表4 二七市での買いものの目的

	野菜	魚貝類	果物	乾物	生花	苗・種子 植木	日用 雑貨	衣類	その他
城北	67.7%	51.6	83.9	19.4	19.4	19.4	3.2	—	—
甲山	65.9	38.6	70.5	15.9	11.4	40.9	2.3	2.3	—
竜海	72.9	50.0	64.6	27.1	20.8	52.1	4.2	10.4	4.2
葵	65.5	49.4	72.4	17.2	16.1	36.8	2.3	3.4	3.4
南	66.7	83.3	50.0	50.0	—	33.3	33.3	—	—
矢作	32.3	29.0	41.9	25.8	9.7	54.8	—	6.5	6.5
矢作北	34.6	38.5	46.2	19.2	—	69.2	3.8	11.5	7.7
岩津	37.8	56.8	62.2	27.0	2.7	62.2	2.7	8.1	—
美川	57.9	44.7	60.5	18.4	7.9	50.0	10.5	2.6	—
常盤	66.7	59.3	63.0	14.8	18.5	51.9	14.8	3.7	—
東海	27.0	35.1	27.0	16.2	5.4	75.7	8.1	10.8	2.7
河合	38.1	14.3	57.1	14.3	14.3	76.2	14.3	4.8	4.8
香山	25.0	12.5	43.8	—	18.8	75.0	31.3	6.3	—
福岡	66.7	100.0	66.7	—	33.3	—	—	—	—
六ツ美	42.9	42.9	50.0	21.4	28.6	57.1	7.1	14.3	7.1
全体	53.0	44.0	60.1	19.3	12.9	51.1	6.4	5.8	2.6

※調査した1083人のうち二七市にくる466人の回答率である。  
(1981アンケート調査による)

表5 中学校区別にみた二七市の魅力

	城北	甲山	竜海	葵	南	矢作	矢作北	岩津	美川	常盤	東海	河合	香山	福岡	六ツ美	全体
安さ	35.5%	54.5	35.4	28.7	33.3	25.8	42.3	51.4	42.1	44.4	40.5	47.6	12.5	—	64.3	38.8
新鮮さ	87.1	81.8	81.3	88.5	66.7	32.3	57.7	64.9	76.3	88.9	56.8	61.9	50.0	66.7	42.9	71.9
よい品が買える	16.1	20.5	10.4	11.5	33.3	16.1	3.8	27.0	21.1	11.1	5.4	9.5	6.3	33.3	21.4	14.4
通常手に入らないものが買える	3.2	6.8	18.8	8.0	16.7	25.8	15.4	16.2	10.5	14.8	21.6	19.0	25.0	—	7.1	13.7
必要なものがみんなそろう	—	4.5	6.3	—	—	16.1	11.5	2.7	—	—	13.5	14.3	—	—	14.3	5.4
品物を選べる	19.4	22.7	29.2	10.3	—	29.0	19.2	16.2	18.4	18.5	16.2	14.3	18.8	—	14.3	18.2
安く値切れる	3.2	2.3	10.4	8.0	—	3.2	3.8	8.1	7.9	7.4	—	14.3	12.5	33.3	—	6.4
人間味のある雰囲気	22.6	20.5	25.0	18.4	—	29.0	19.2	29.7	15.8	25.9	16.2	28.6	18.8	—	21.4	21.5
社交の場として	—	2.3	2.1	—	—	3.2	—	—	—	3.7	—	4.8	6.3	—	—	1.3
その他	3.2	2.3	—	—	—	—	—	2.7	—	—	2.7	—	—	—	—	0.9

※調査した1,083人のうち二七市にくる466人のうちでの回答率である。(1981 アンケート調査による)

あげているが、遠方地域では主に植木・苗・種子・果物が買いものの目的になっている。魅力も、野菜・魚貝類が買いものの目的から減少するために「新鮮さ」の値が小さくなり、「安さ」と、植木・苗という通常手に入りにくいものが買えることが大きな魅力となっている。このように二七市に対する魅力は地域によって差がある。逆に言えば、各々の地域の期待にこたえられる二七市は、遠方からの客も吸引しているのである。

他の魅力としては、「人間味のある雰囲気」が

21.5%を占め、定期市がもつ一種独特の雰囲気が人々を引きつけているようである。また、この雰囲気は、市を一種の行楽の場にさせており、来市者の中には散歩を兼ね楽しむ人が多い。特に休日は、家族づれで市を楽しむ人が多くなる。このようなことも、二七市の存続要因となっているのである。

## VIII 結論

二七市は、闇市を基盤として、早い時期から市

街地の中心部に立地した。その開設場所は、中心商店街の影の地域であり、このことが、中心商店街がもつ交通の便のよさや客の吸引力を活用し、人口集中地区である周辺はもとより、遠方からも多くの客を集めている。また、遊歩道化し得る広い通りと周辺の駐車ができる小路地の存在により、多くの出店者を収容し、自家用車による客をも吸引している。この地域が、市立地に関して地理的位置の優位性をもっていることは明らかである。

また、定期市がもつ一種独特の雰囲気、行楽的な性格、新鮮さ・安さ、ここにしかない商品を買う、等々の魅力をもって、多くの顧客を得ている。また、場割の恒常性によって顧客と密着していることも、その存続要因に加えられる。加えて、地域商店街と共存共栄をはかり、地域商店街という強力なバックをもっていることが、西三河では他にはみられない要因になっている。

このような要因により、二七市は、副業的に市出店をする農家の人々や衣類・乾物・果物・魚貝類・生花を商う市専業商人を多く集め、約150軒という西三河最大の出店規模を誇っている。また、その商圈もきわめて広い。二七市の場合、現代商業との競合によって定期市は廃止に追い込まれるという従来の考え方にあてはまらず、逆に中心商店街の力を利用し、定期市開設地の商店街との共存共栄の実を示しているのである。

ただ、ここで考えなくてはならないことは、定期市というものが、果して単独で存在し得るかということである。西三河の定期市の場合、出店者の主流は市専業商人が占めている。そして、彼らは、独自に移動網をもち、それによって生活を支えている。現在、各々の定期市は、定期市網の存在に支えられており、逆にいえば、各々の定期市の存続が、他の定期市の存続のキーを握っているのである。

## 謝 辞

本論文をまとめるにあたり、終始御指導をいただいた松井貞雄先生はじめ、愛知教育大学地理学教室の諸先生方、ならびに御協力いただいた二七市関係者・中学校関係者、さらに地元の方々に厚くお礼申しあげる。また、岡崎市立井田小学校の石川守彦先生には、資料収集の便宜と多くの教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

## 注

- 1) 中島義一(1977):三河の定期市 駒沢地理13号, pp. 35~45.
- 2) 知立市広見町の市(出店規模40軒)と刈谷市一ツ木町の市(同18軒)、西尾市平坂町の市(同10軒)と鶴ヶ崎町の市(同10軒)が近接している。
- 3) 西尾市の市の場合は、当初、道路上で市開設がなされていたが、昭和47年のユニット規制により、道路上での市開設ができなくなった。
- 4) 植木の出店者は集めて配置され、果物の出店者は競合を防ぐために分散されている。
- 5) 主に市出店によって生計をたてている人々。
- 6) 他に生計を支えるものを持ち、副業的に市出店をする人々。たとえば、農家の人々が、農協等へ出荷し、生計を支える一方、現金収入を得るために市出店を副業的にする場合などがある。
- 7) 大門町周辺から14軒の野菜の出店がある。
- 8) 六ツ美地域から21軒の野菜の出店がある。
- 9) 西尾市の鶴ヶ崎町・菅原町・衣文町・永楽町の市には街商組合員は出店できない。
- 10) 各中学校の1割の生徒の父兄でその中学校区を代表させ、計1,083人に対して行なった。
- 11) 半径500m以内に約2,000戸の世帯数、7,000人を越える人口をもつ。
- 12) 康生通西は買回品店64.5%・最寄品店13.1%・サービス業20.5%。康生通東は、買回品店53.3%・最寄品店13.3%・サービス業33.3%。本町は買回品店67.9%・最寄品店12.5%・サービス業17.0%である。

- 13) 買回品店36.8%・最寄品店63.2%。
- 14) 業種的にみると、食料品・衣料品・雑貨関係の店及び飲食店が好影響を受けている。
- 15) 発展会の力により、道路上での市開設を関係諸官庁に認めさせているのである。

#### 参 考 文 献

中島義一（1964）：『市場集落』 古今書院。

樋口節夫（1976）：『定期市』 学生社 231 P。

服部銈二郎・杉村暢二（1973）：『商店街と商業地域』 古今書院 398 P。

商業近代化委員会岡崎地域部会（1972）：『岡崎地域商業近代化地域計画報告書』 224 P。

岡崎商工会議所（1968）：『七十年史』 pp. 1—11。

岡崎市役所（1953）：『岡崎市戦災復興誌』 pp. 852—883。